

演題名：血漿カルニチン濃度の上昇がみられた猫の第3度房室ブロックの一例

発表者氏名：○大池三千男 1) 宮原和郎 2) 古林与志安 3) 千村収一 4) 町田 登 5)

発表者所属：1)おおいけ動物病院・帯広 2)帯畜大家畜病院 3)帯畜大病理 4)千村動物病院・愛知 5)農工大病理

1. はじめに：カルニチン欠乏は犬の拡張型心筋症の原因の一つである。演者らは、平成14年度本学会において、虚血性心疾患による心筋障害により、血漿カルニチン濃度の上昇をきたした症例を犬で報告した。今回、臨床的に肥大型心筋症が疑われ、第3度房室ブロックを起こした猫で、血漿カルニチン濃度の上昇を認めたのでその概要を報告する。
2. 症例：雑種猫、雄、去勢済、6歳齢、体重3.64kg。一週間行方不明で、今朝帰宅。痩せたが、食欲、飲水欲はあった。夜になって流涎と痙攣発作を発現した為に来院した。身体検査では、体温39.0°C、心拍数144回/分、呼吸数132回/分、心音微弱、肺音粗効。来院時横臥状態で、流涎症と瞳孔散大を伴う数秒間の硬直性失神を4～5回繰り返した。
3. 治療および経過：心電図検査で左脚ブロックが認められた為、心臓性の発作を疑い、直ちに肛門とペニスの包皮粘膜に硝酸イソソルビドのスプレーをした。流涎と発作がやや緩和した為、ニトログリセリン舌下錠を口腔内に投与した。その後、流涎と硬直性失神は劇的に改善された為、各種検査を実施した。超音波検査では、肥大型心筋症が示唆された。ホルター心電図検査では、左脚ブロックと第2度房室ブロック及び心室性期補充収縮がみられた。継続治療として、硝酸イソソルビド、エナラプリル、ジピリダモールを投与した。第169病日に再び心臓性の発作で来院した。第3度房室ブロックによる心臓発作を繰り返し、治療に反応しない為、飼い主の希望で、安楽死した。血漿カルニチン濃度は第1病日の心臓発作時に68.0(μmol/l)と上昇し、第25病日の安定時では24.3と正常値であった。第169病日第3度房室ブロックが原因の心臓発作時は94.6と再度上昇していた。病理検査では、左心室はやや拡張し、ヒス束周囲での高度の線維化とそのヒス束への波及によって、ヒス束～左脚にかけての特殊心筋線維が高度に脱落しており、第3度房室ブロックの原因病巣と思われた。また、多巣性の線維化、心筋脱落・脂肪浸潤、および急性巣状心筋壊死が観察された。
4. 考察：本症例は臨床経過および病理所見から、猫の拡張型心筋症が疑われた。第3度房室ブロックの発症で、心筋障害を起こした事が推察され、血漿カルニチン濃度は心筋障害（心臓発作）と一致して上昇していた。従って、犬と同様、猫においても心筋障害時に血漿カルニチン濃度が上昇する事が示唆された。今後、症例数を増やし検討していきたい。